

『シモーヌ・ヴェイユの詩学』 今村純子、慶應義塾大学出版会、2010年

おやさと研究所教授
金子 昭 Akira Kaneko

『シモーヌ・ヴェイユの詩学』は、ヴェイユ生誕100年の2009年、一橋大学に提出された博士論文を元に、本年6月に刊行された。終章を含めると全15章、5部構成で、各部の終わりにヴェイユの思想に触発された映画論のessaiが置かれ、総頁数421頁の労作である。

本書の特徴は3つある。

第1に、本書はヴェイユの思想世界を徹底的に掘り下げた最新の研究書である。第2に、本書は西田幾多郎や鈴木大拙、H・アーレントとの比較思想論的考察も踏まえ、ヴェイユを多角的・立体的に論じた比較思想史的著作である。そして第3に、挿入された5編の映画論がヴェイユ思想の今日的意義と展開を訴える内容ともなっていることである。この3点目は、著者の今村純子氏独自の映像倫理学のコンセプトに基づく野心的試みでもある。映像倫理学とは「映像芸術による倫理の探究」であり、今村氏が構築中の新しい学的領域である。

本稿では、ヴェイユの思想の紹介をかねて、主に第1の点を中心に論評してみたい。

シモーヌ・ヴェイユ Simone Weil (1909-1943) は、20世紀前半に生きたユダヤ系フランス人の女性哲学者である。彼女は、わずか34歳という短い生涯において、詩的香りのただよ独特な思想を作り上げた。女性だからといってフェミニストではなく、ユダヤ系だからといってシオニストでもない。一種の神秘的なキリスト体験もしているが、いわゆるキリスト教徒にはならなかった。彼女は、あらゆる主義、学派、党派に属することを峻拒するのである。

ヴェイユの思想は、「不幸の形而上学」とも形容される。不幸とは、どこにも目的が見出せず、すぎるべき神も不在、自らもまた恥辱にまみれ、魂が粉碎されたような状態を指す。しかしその不幸のただ中であって、まさに「美的感情」すなわち主観の感性における歓びが湧き上がり、そこに超越性と実在性の一致が図られるのである。その端的な象徴が十字架上のキリストであるという。

ただ、そういう宗教的側面はヴェイユの思想の半面であるに過ぎない。彼女が独自の思想を形成していったのは、むしろプラトンやデカルト、カントの哲学を研究する中からである。今村氏は、とくに重要なのはデカルトだと主張する。それは、フランスのヴェイユ研究者であるM・ヴェトーが、より多くプラトンとカントの影響に注目するのに対して、今村氏ならではの優れた着眼点である*。

デカルトは、どんな凡庸な思惟にも精神があることを明らかにした。そして「私が考える」という作用が、世界との関わりの中で最も先鋭に現われる行為こそ、まさしく「労働」（「作業」とも訳される）なのであると見なす。ヴェイユはまさにここで、アカデミズムの世界を突き抜けて現実世界へと突破するアルキメデスの点を発見したのである。やがて彼女は、一女工として工場生活の中に飛び込むことになる。女工としての経験は、彼女に労働者の置かれた過酷な現実をつきつけた。そして彼女の思想に、労働者の苦しみを受肉するという「奴隷の刻印」を帯びさせることになったのである。

ヴェイユは、沈黙する真理の悲痛な叫びを聴きとる感性の大切さを強調した。この超越的な美的感性論が、彼女の美学でもあり詩学でもある哲学思想として結晶していく。そうした境地から、「労働者に必要なのはパンでもバターでもなく、美であり詩である」という、彼女の語りも生まれてくる

のである。ここでいう美とは、他者のリアリティに直面して感じる魂の感情であり、ここでいう詩とは、人生そのもの、現実存在そのものであるような詩である。

その短い生涯の最後に、ヴェイユは、第二次世界大戦中のイギリスで「自由フランス」のために働いた。しかし体調を崩して入院し、やがてサナトリウムに移される。そこで彼女は、「フランスの子どもたちに配給されている以上の食べ物とはらない」と言いつつ、栄養失調で亡くなった。

ヴェイユの思想はたしかに完全に成熟したものとは言い難いし、またある意味で極端に走るところがないわけではない。しかし、その実存を賭した彼女の思想は、形而上学の中に美学・芸術論が嵌入し、さらに宗教や倫理の光がそこから放射する、きわめて特異な原石としての哲学であり、それら一切が結晶した姿なのである。

最後に本書の概要について記しておく。

第I部は「労働と詩」と題し、ヴェイユによるプラトンおよびデカルト研究の解明に当てられている。第II部は「美的判断力の可能性」で、ヴェイユにおける「美」の概念をめぐって西田幾多郎やH・アーレントとの比較考察がなされる。第III部「善への欲望」では、この世での神の不在が実は天における神の存在証明でもある「脱創造論」の概念が美や愛との関連で論じられる。第IV部「芸術と倫理」と第V部「詩をもつこと」は、美の具現としての芸術創造が論じられ、その中で西田や鈴木大拙との比較が行われる。

各部の終わりに、映画論のessaiが置かれている。取り上げられた映画は『千と千尋の神隠し』、『女と男のいる舗道』、『ライフ・イズ・ビューティフル』、『アメリ』、『ガイサンシー（蓋山西）とその姉妹たち』の5編。いずれも新たな学問的息吹を感じさせ、興味は尽きないものがある。

*今村氏にはM・ヴェトーの訳書もある。ミクロス・ヴェトー『シモーヌ・ヴェイユの哲学—その形而上学的転回』（今村純子訳、慶應義塾大学出版会、2006年）。

